

## 通訳案内士試験 歴史④

### 関連動画 江戸—近現代

伊能忠敬

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09830/v0982700000000541087/>

横浜港

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09830/v0982700000000541190/>

松下村塾

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09836/v0982700000000541129/>

大政奉還

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09833/v0982700000000541231/>

近衛文麿

<http://www.youtube.com/watch?v=74h-Pvy10w&feature=related>

東条英機

<http://www.youtube.com/watch?v=Wp8BdrRzPHw&feature=related>

吉田茂

<http://www.youtube.com/watch?v=DDEuMQXJG6E>

東京裁判

<http://www.youtube.com/watch?v=grFZiNaNVds&feature=related>

鳩山一郎

<http://www.youtube.com/watch?v=gV37CSevy6Q&feature=related>

### 高田の独り言

#### 19 伊藤博文—明治日本を作った男

明治時代を作った人物として筆頭に挙げられるべき男と言えば伊藤博文だろう。

長州藩の貧農として生まれたが、父親が足軽の家に養子に行ったため、幼き博文も末端の武士となった。その後16歳にして吉田松陰が教鞭をとる松下村塾に入門。そのときから彼の人生は大きく変わりつつあった。尊王攘夷を唱える「過激派」の松陰先生のもとでともに学んでいた後の木戸孝允の従者となり、江戸に赴いた。しかしそこで松陰先生の訃報、すなわち安政の大獄によって大老井伊直弼により処刑されたことを知らされる。世田谷区の東急世田谷線にはその名も「松陰神社駅」がある。伊藤ら塾生は松陰先生の亡骸をここにまつり、後に神社を建てたのだ。境内には彼らが学んだ萩の松下村塾が復元されており、熱気あふれる志士たちが学問にはげみ、激論を交わす光景が偲ばれる。

そしてその後1863年、伊藤ら五名の長州藩士たちは国禁を犯してロンドンに留学する。彼がその後の日本の中心人物になりえた理由の一つがこのロンドン留学だ。英国で伊藤は欧米機械文明の粋を見た。それだけでなく、近代国家を動かす諸制度を見た。出国前は松陰先生の影響もあり、尊皇攘夷を信奉し、英国人を襲ったりまでした彼だが、ロンドンでその考えは吹き飛んだ。このような国を相手に戦うことの無謀さに気が付いたのだ。彼の「現実主義者」としての一面はその後の人生に大きく寄与した。

伊藤の人生を見ていて面白いのは、ある現実に衝撃を受けるとすぐに考えを変えることだ。悪く言えば無節操、よく言えば融

通無碍。しかし乱世の幕末においてはただひたすら信念を貫いて戦う会津藩よりも現実に合わせて自由自在に自分自身を変える伊藤型が生き延びやすかったのだろう。

英国滞在が半年ほど過ぎたころに起きたのが四か国連合による下関占領である。伊藤は直ちに帰国し、交渉の場で通訳として活躍した。治世ならば絶対出世できぬ足軽の子が、乱世では語学力と洋行による見識を買われて長州藩代表の一員とまでなったのだ。

明治維新後は薩長土肥による藩閥政治が続いたが、その際は木戸孝允とともに長州を代表とする政治家として国政の中心人物「参与」の一員となった。彼が参与になりえたのも英語力のおかげである。つまり文明開化をしていくに当たり、英語力の高い人物が必要だと見込まれたからだ。1871年から始まる岩倉使節団の一員として選ばれたのも同じ理由である。さらに1885年に初代内閣総理大臣となった。彼が選ばれた理由は会議で「これからの総理大臣は英文電報ぐらい読めないと」といったからだといわれている。またもや英語が役に立った。

ところで1880年代には自由民権運動が高まった時期でもある。それを受けてアジアで初めての国会と近代憲法を導入することになったのだが、その中心となったのも伊藤である。単なる英語屋ではなく、「国の青写真」を描いている政治家としての伊藤は特に憲法というものを重視していた。西洋事情に明るい彼は、「文明国」が憲法に基づいた政治を行うことを知っていたからだ。また、憲法に基づいた政治を行うことで、少しでも不平等条約改正、特に治外法権の撤廃の助けにならないか考えたのだ。

伊藤は憲法の研究のためにドイツに赴く。ドイツのプロイセン憲法は君主権が強く、同じく君主国家である当時の日本にとって模範とすべき憲法であると考えられたからだ。彼はまずベルリン大学のグナイスト教授に教えを乞う。しかし教える内容は彼の求めるものとは異なっていた。伊藤は憲法の具体的条文よりも、そもそも立憲国家とは何かという物事の根本から知りたかったのだ。その後オーストリアのウィーンにシュタイン博士を訪れ、ようやく立憲国家の何たるかを、またその先にあるものが何であるかをつかんだ。アジアで初の憲法は、極東を遠く離れたウィーンで芽生えたのだ。

帰国後、神奈川県横須賀の別荘地、夏島にて仲間たちと憲法を書き上げた。これが1889年に発布された、天皇を君主としていただく大日本帝国憲法である。これによって伊藤の考える「天皇のもとで、選挙によって議員を選び国事を決める」という「文明社会」のかたちができあがったのだ。

ただしその「文明国」というのはあくまで欧米を念頭に置いて作ったものであり、清朝や朝鮮といった隣国に対しての立場はかなり強引である。1894年、朝鮮半島で甲午農民戦争が起こる。朝鮮はその鎮圧を清朝に依頼したが、日本と清朝は互いに朝鮮に軍隊を出さない取り決めになっていた。しかし清朝が出兵したことにより日清戦争になった。日清戦争の講和条約は山口県下関、すなわち伊藤の地元で行われている。

下関市には今も日清講和記念館として、当時使用された椅子やテーブル他、調度品が残されている。ここで伊藤首相および陸奥宗光外相が、清朝の李鴻章らと会談したのだが、宿泊所の寺院から会場に移動する

間、李鴻章は群馬県出身の暴漢に銃で撃たれた。幸い大事に至らなかったものの、再び刺客に襲われることを考え、宿泊所からこっそりと裏道を通り会議場の春帆楼に向かったらしい。今もその小道は「李鴻章道」と呼ばれ、残されている。



↑日清講和記念館（下関市）

下関条約以降、朝鮮半島は名目上清朝から「独立」した。そして皇帝による専制が敷かれることになった。そこで伊藤が行ったのは、日本の立憲政治という名の「文明」を、できたばかりの大韓帝国に移植することだった。

しかし彼のやり方は功を奏さなかった。五百年続いた李朝は形而上学的、観念的な「朱子学」を重んじてきた。伊藤のような現実主義とは相いれない考えだ。伊藤自身は幼少のころから漢学に親しんできた。しかしそれはあくまで趣味の延長線上に過ぎず、かれは現実主義、実用主義者だったのだ。彼は韓国の知識人に儒教という「旧習」を捨てさせようとした。それだけではなく、日本が指導しなければこの国の近代化は達成できぬという結論に達した彼は、1905年に第二次日韓協約を韓国側に結ばせた。これにより、韓国は外交権と軍事権、警察権を日本側に掌握された。そして伊藤は韓国統監としてその後4年にわたり君臨した。

文明の基礎が教育にあると考えた彼は近代的な学校を作り、教師も日本から派遣し

た。日本人教師には韓国人の生徒に対し、韓国人としての誇りを持たせるようにし、また教師自ら朝鮮語を学ばせたりもした。しかし、一連の政策により韓国人の心まで掌握できたとは言い難い。

伊藤は当初、韓国はあくまで独立国として残し、これを文明国になるまでは保護すべきであるという立場だった。しかし彼が東京を離れている間、日本政府では日韓併合に舵を変えつつあった。初めはこれを受け入れなかった伊藤だが、1909年にはこれを受け入れざるを得なくなった。原因は当時の満州、特に現吉林省延辺朝鮮族自治州居住の韓国人の所属問題である。当時多くの土地を失った韓国人が国境を越えて清朝に耕作地を求めて移住していた。延辺の地は清朝の領土でありながらそうした韓国人が人口の大部分を占めていた。そこで生じたトラブルを日本側が裁くべきだという機運が東京の政府で高まりつつあった。しかし清朝にとり延辺は自国領であるため決して受け入れられない。伊藤はこの問題が日清間の火種とならないように満州は清朝が管理し、朝鮮半島は日本が管理することを明確化し、「住み分け」するために、現実路線として日韓併合を受け入れたといわれる。

私は1994年から1996年まで二年半、延辺に住んでいた。当時でも私の周りの過半数が朝鮮族であった。中国ではあっても日常的にも朝鮮語で暮らしていた。しかし1900年代には日清韓が相争う国際政治の舞台だったのだ。

1909年10月、伊藤はロシアの要人と会うためにハルビン駅を訪れた。そしてそこで彼は韓国人パルチザン（遊撃隊）安重根に暗殺された。伊藤が倒れた十か月後、日

本側では異を唱える者はほとんどいないまま日韓併合が正式に行われ、韓国は国権を失い大日本帝国領の朝鮮となった。その後安重根は朝鮮民族の英雄となった。



↑ 哈爾濱駅内安重根義士記念館

2013年、中国と韓国で反日的機運が高まったとき、中韓合作でハルビン駅に建設したのが安重根記念館である。見学者の話では展示内容はお世辞にも立派とは言えないそうだ。また、安重根の活躍のみ劇的に描かれ、伊藤がどのような人物であったか、展示物では理解できないという。さらに見学する人は韓国人が主で、中国人はほぼ関心を示さないらしい。しかしこのような施設をあえて建設するところに、いまなおこの一帯が日中韓のぶつかり合いの場であることが確認できる。伊藤のころからあまり進歩していないとすると、われわれはこの一世紀余り何をしてきたのだろうか。

### 草の根ハイカラ主義の町、小樽

北海道内で最も「ハイカラな」街というと、札幌の港町として発達した小樽に一票を投じたい。サッポロもハイカラであるが、それは「官製」なハイカラさであるのに対し、小樽のハイカラさはどこことなく「草の根的」なハイカラさなのだ。前者を欧米に追い付き追い越そうとした「懸命さ」、言い換えるならば「押し付けられたハイカラさ」だとするならば、後者はそれを咀嚼した後

で欧米文化を自主的に選んで楽しんでいるかのようなハイカラさを感じさせるのだ。

ちなみに同じく港町の横浜や神戸、長崎と比較すると、この街は外国人の住人が少ないのに気づく。よく考えるとそもそも「ハイカラさ」というのは和風アレンジされた「洋風」であり、舶来のしゃれた欧米文化そのものとは異質のものなのだ。ハイカラさとは和風化された無国籍な洋風であり、それを着こなした初めての時代が大正時代の都市住民たちではなかろうか。

この街を舞台とした「文化人」たちは良くも悪くもこの街の持つ草の根ハイカラ主義の影響を受けている。大正デモクラシーの時代にプロレタリア（社会主義）文学の旗手として「蟹工船」などを書き、結局は治安維持法によって逮捕され、拷問の末に殺された小林多喜二などもこの街で青春を過ごした。プロレタリア文学のどこがハイカラかと思われるかもしれないが、国家主義、軍国主義がはびこるあの時代、社会主義は都市のインテリたちにとって舶来の理想主義だったのだ。しかし彼のように生命を賭してまでそれを貫いたものは少ない。この街には彼の通った学校などは現在小樽商科大学となっている。札幌農学校が官製の農業大学とするならば、やはり小樽は民間の商業大学を重んじる街なのだ。

彼は商業が代表する資本主義のアンチテーゼたる共産主義の道を歩んだのではあるが、彼に関する展示は今なお市内の小樽文学館のハイライトであるのが興味深い。

なお、この街で最も「絵になる」光景というと、やはりかつて舶来品が保管されていたと思われる運河沿いの倉庫群と、オルゴール堂や北一硝子の店などが並ぶハイカ

らな通りだろう。商業用地で新しい店舗なども少なくないから、あいにく重伝建には指定されていないが、ところどころ残る洋館や倉庫は、この街のハイカラさを雄弁に物語っている。



↑運河沿いの倉庫群（小樽市）

そしてこの街の最もロマンティックな時間は夕暮れである。あまりにもおあつらえ向けのハイカラさが苦手で、ランプがともった運河沿いの街を家内と歩くのも気恥ずかしかった「日本男児」の私は、夕暮れ時にこの街を南から見下ろす標高 532m の天狗山に登った。展望台から眺めると西の海に太陽は沈み、東側の眼下に広がる小樽の街は少しずつライトアップし始める。気が付くと赤、白、青の光が宝石をちりばめたかのように街を飾っていた。この街のハイカラさを楽しむには天狗山（名前はあか抜けないが）からのぞんだ夕景に限る。

大正デモクラシーによって定着したハイカラさがどのようなものなのか追体験するには、ぜひこの街の夕暮をお勧めする。

### おかかたちが立ち上がった町、魚津

ハイカラでもなんでもない、大正時代の「影」の部分を見たくて富山に向かった。当時、社会主義国家ソ連成立を阻止するためのシベリア出兵に際して、政府が米を買い占めると目論んだ米問屋たちは民間の米屋に米を売り渋った。越中魚津の「おかか」

たちは、生活のために米袋を港に停泊している船に運んでいた。船に運ぶ米は山ほどあるのに、それを自分たちには売ってくれない。さらに米価はわずか数か月で二倍近くになった。想像してみてください。今日 5 kg 2000 円の米が、三か月後に 4000 円になったことを。そこで 1918 年の夏、おかかたちは米問屋に頼み込んで、米価をさげてもらおうとした。この時、おかかたちはのろしを掲げてはいたものの、暴力的行為は一切なかった。地元のマスコミはこれを新聞記事にしようとしたが、圧力により断念せざるをえなかった。その代わりにその記事を東京のマスコミに流したところ全国版に載り、それを読んだ全国の窮民たちが米屋を襲いだした。責任を取って長州閥の寺内首相は辞任。かわりに盛岡出身の平民宰相、原敬が総理大臣となり、大正デモクラシーの象徴的出来事として記憶されることとなった。

ところで魚津の米騒動はブルジョアたちの米投機がおこしたという点で極めて近代的な民衆運動だった。さらに新聞、すなわちメディアが日本中に広めたという点でも近代的傾向といえよう。米そのものがないから百姓が立ち上がった江戸時代の百姓一揆とはそこが違うのだ。しかしこれに対し、鎮圧のため寺内正毅は軍隊を導入した。単純な図式では、民衆は the power of powerless（力なき者のパワー）を意識した大正人、政府は藩閥意識（お上意識）まるだしの明治人とでも言えるのかもしれない。ただ、はたして越中のおかかたちに、そのような自覚はあったのだろうか。文字も読めるか読めぬかというおかかたちにとっては、今日家族に食わせるコメがない、だか

ら立ち上がった、というようなものなのではなかろうか。

奇しくも時を前後して、大正時代という時代は婦人運動を推し進めた平塚らいてうらが青鞆社を、また被差別部落解放を掲げて全国水平社を、あるいは資本家を打倒し労働者の世の中にすることを標榜する日本共産党を、さらには朝鮮の独立を求めて三一運動を、といった具合に、各地であらゆる被抑圧者が同時に声を挙げた時代だった。よって越中のおかかたちもこの範疇に入れれば理解しやすいのだが、私はこれに関しては疑問である。家族のために米価引き下げをお願いしたにすぎないではないか。実は魚津市では最近までこのことは「隠したいこと」としてあまり語られなかったというが、1998年に市内にようやく米騒動発祥の地のモニュメントが作られ、周囲は公園化された。そしてその隣にはおかかたちが請願に集まった十二銀行が保存されている。



被抑圧者としての自分に目覚め立ち上がった人もたくさんいた。しかし民衆は案外、目先のことを考えて動き、それをインテリが理論化したというのが大正デモクラシーのもう一つの姿ではなかろうか。